



杉原 方教授

## 杉原 方教授記念号によせて

前社会学部長・学長 武 田 建

昭和27年4月といえば、まだ社会学部が創設される6年も前のことである。文学部の社会事業学科に新進気鋭の精神医学者が着任なさった。それが杉原方先生であり、先生の最初のクラスの学生が私であった。とにかく、その頃の社会事業の専攻は、社会学科のなかに間借りをし、竹内愛二先生が唯一人のスタッフという淋しい状態であった。そこへ杉原先生と助手の丹治義郎先生（在米）の加入があって、一つの学科として独立することができたわけである。それ以来、先生は一貫して社会福祉の教授陣の中核として、私たちを支え励ましてきて下さった。その先生が、34年間にわたる学院での教育と研究のご生活に、定年のためとはいえ別れをおつけになることは本当に淋しいかぎりである。

杉原先生は、奈良県のお医者様のご家庭にお生まれになり、三代目というから、近頃駆け出しの医者とはわけが違いと書くと、先生から「下らんことを言うな」とお叱りを受けそうな気がする。先生は、目立ったり、儀式ばったことが大嫌いな方なのである。

奈良市の小学校を卒業なさると、すぐ神戸にある旧制の7年制の甲南高校の尋常科と高等科をご卒業になり、大阪帝国大学医学部にすすまれ、精神医学を専攻、卒業と同時に精神病学教室の副手になられたが、大平洋戦争のために軍医として海軍にゆかれ、終戦のときには海軍少佐だったということである。戦後、再び大阪大学医学部へ助手としてもどられたが、その後大阪府中央児童相談所に移られた。この間精神衛生活動の視察のために渡米なさった。新しい時代の流れを肌で感じて帰ってこられた先生が、そのご活躍の領域をただ単に精神医学の世界だけではなく、臨床心理と社会福祉に広げてゆかれたのも、当然のことであったかもしれない。当時、大阪大学の精神病学教室では心理テストや心理療法の研究が盛んであり、先生はその中心にいらっしゃった方の一人である。戦後初めて本格的な臨床心理学のシリーズものとして有名な、異常心理学講座（みすず書院）のなかに「TAT」、心理診断法双書（中山書店）では「ロールシャッハ・テスト」について執筆しておられることからしても、先生が現在もてはやされてきた心理テストの先駆者的存在であることがわかるであろう。

精神病理学者としての先生は、多くの論文を書いておられるが、長い研究生活を通して、先生のご関心の中心は常に精神分裂病にあったように思う。社会学部紀要に何年にも渡って、シリーズでこの領域についての論文を沢山書いておられる。杉原先生のもう一つのご

関心は、精神病理学と社会病理学の接点のようなところにあったのではないだろうか。学院に来られる前から今にいたるまで、先生は梅田厚生館という生活保護を受けている人たちの施設で診察を続けておられる。こうしたご経験が、先生のご研究の一部となって論文としてまとめられてきたのである。

先生は堅苦しい場所は苦手な方だ。しかし、先生独特の思いやりと暖かさで教授会の空気を和やかにし、事務室のなかに笑いをもたらして下さった。先生御夫妻をしたってくる教員、卒業生、大学院生と毎年夏の終りに伊勢志摩の御座にゆかれ、海にもぐり、釣りをし、ゲームを楽しむ伝統を私たち後輩のために何時までも続けて戴きたいと思うのは私だけではあるまい。先生は人知れず、隠れたところでそっと私たちを助けて下さる方だ。こうしたお人柄に社会福祉を志す学生がどれだけ影響を与えられたかと感謝にたえない。

もう一つ先生の知られざる面をご紹介します。先生は大変なスポーツマンである。旧制高校のときは、バスケットボールの名選手として鳴らし、全国大会で二度優勝したチームのキャプテンであった。また、戦後まもなく、神戸学士クラブが日本のバスケットボール界を席卷したとき、そのチームの主要な一員でもあった。私が大学院生のとき、神戸YMCAの余島キャンプで、我が国最初の身体障害児のキャンプに、先生のお伴をした。リーダー対ドクターの試合をしたとき先生の動きには、目を見張ったものである。

多くの偉大なお働きをしてこられた杉原先生とお別れすることは悲しいことであるが、幸いご定年退職後も、先生に引き続き大学院の講義を担当していただける。今後も先生の元気な顔を拝見できることは、私達一同の大きな喜びである。先生がご健康に恵まれ、いつまでもご活躍なさることを祈りたい。

付記・武田教授には本記念号の企画編集段階での学部長として原稿を依頼しましたが、1985年11月に学長に就任されましたので、両職名を併記させていただきました。(社会学部研究会評議員会)